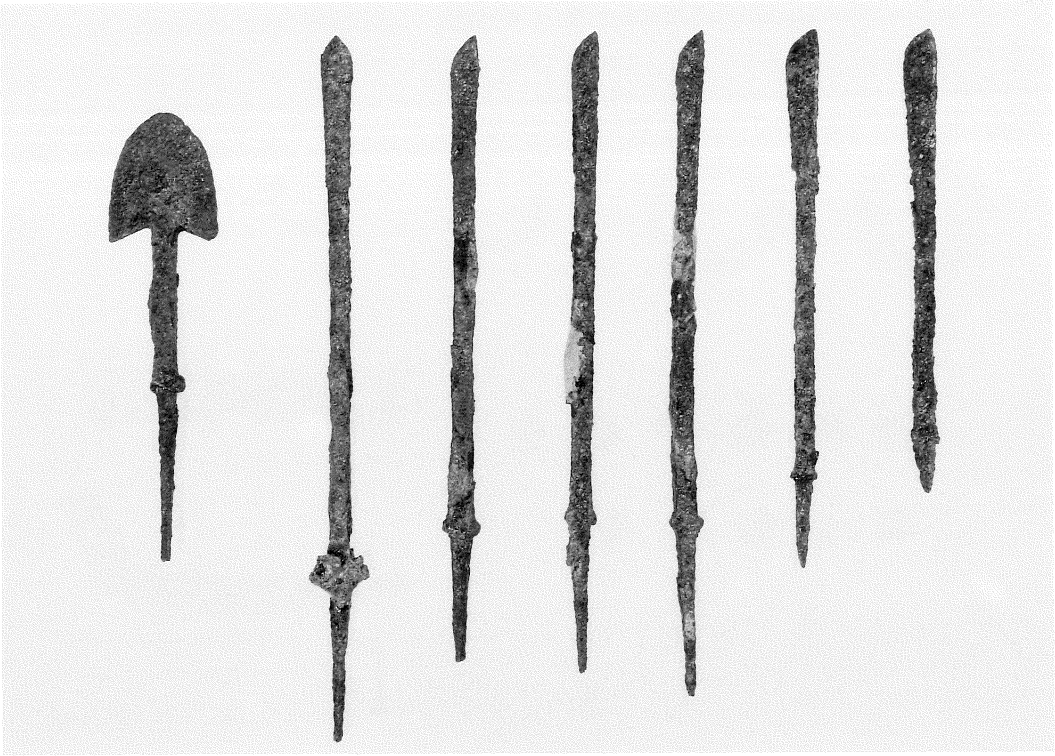
研　究　紀　要

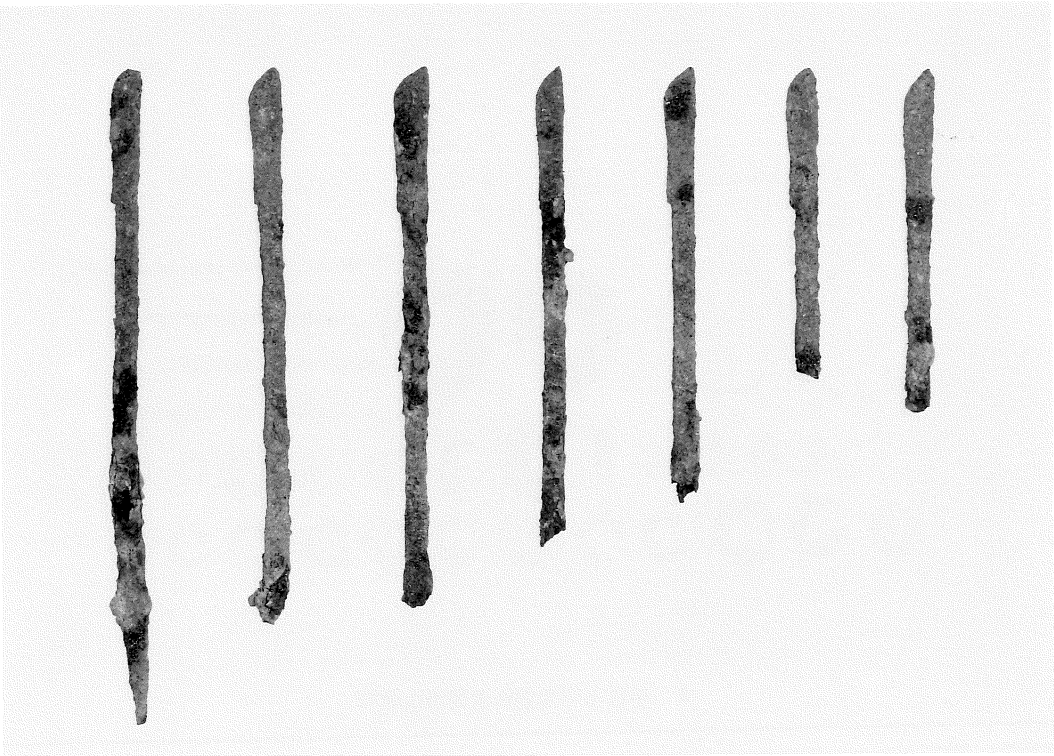
第 10 号

1 9 9 3

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

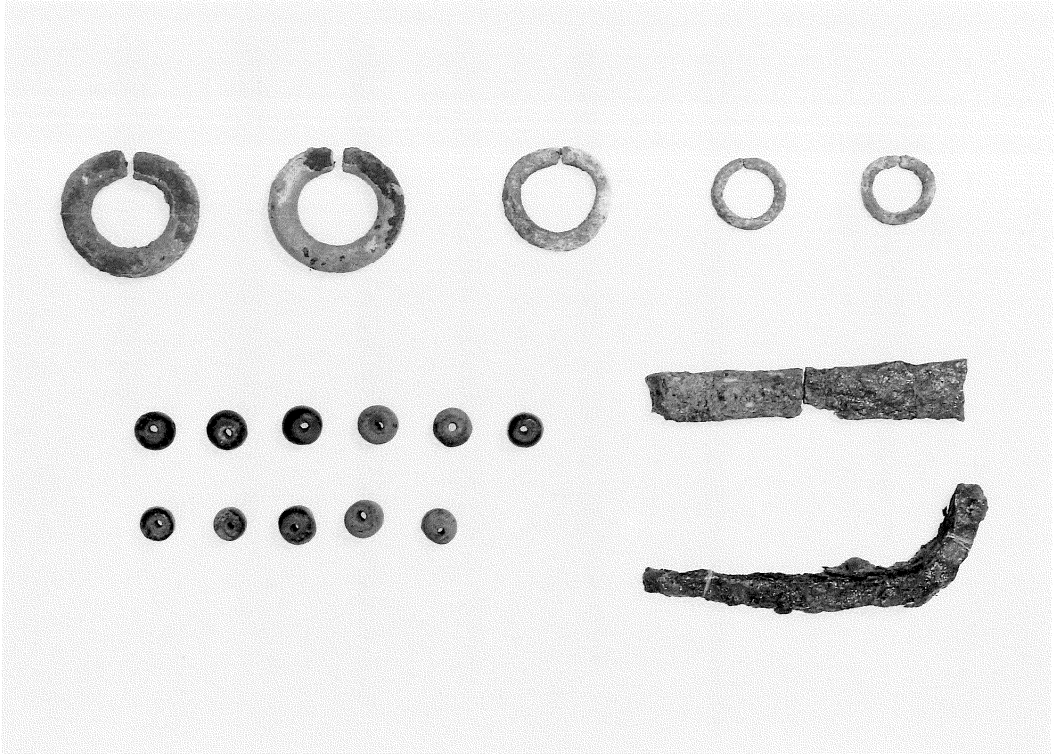


1　毛呂山町川角15号墳　鉄鏃（1）

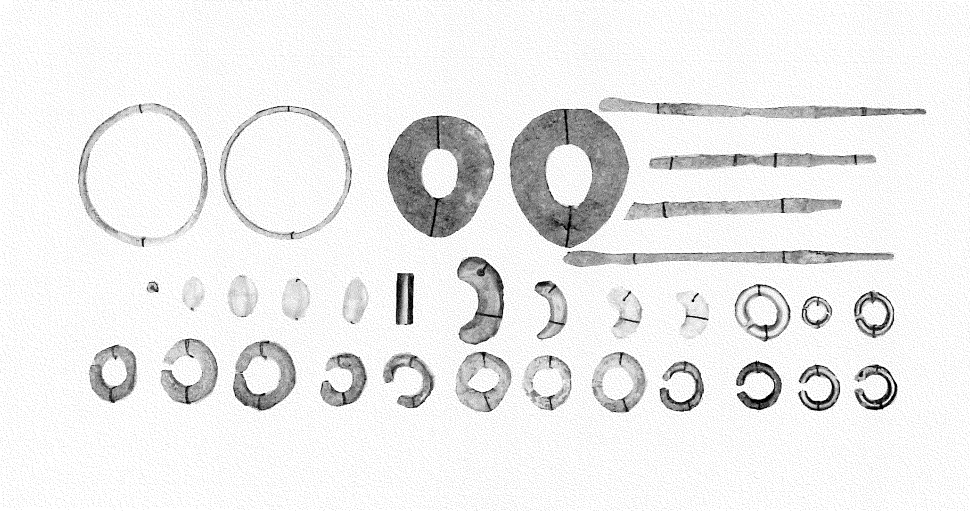


2　毛呂山町川角15号墳　鉄鏃（2）

図版 2



3　毛呂山町川角15号墳　装身具・鉄製品



4　毛呂山町大類古墳群出土遺物

目　　次

序
〈論文〉
子母口式新段階「木の根Ａ式」土器の再検討　金子　直行……(　1)
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—

羽状縄文系土器の紋様構成（点描）２　黒坂　禎二……(45)

遮光器系土偶についての考察　浜野美代子……(83)

方形周溝墓出土の木製品　野中　仁　福田　聖……(113)

吉ケ谷式集落の展開　石坂　俊郎……(159)

埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相　山本　靖……(181)

東国における終末期古墳の基礎的研究（２）
田中広明　大谷　徹……(203)

腰帯の一考察　田中広明……(245)

北武蔵の古代通路について　井上尚明……(257)

吉ケ谷式集落の展開

石　坂　俊　郎

要約　吉ヶ谷式集落の研究は、発掘調査にともなう基礎資料の増加によって、これまでの低調な研究史に節目をつけるべき時期に至っているとおもわれる。本稿は、集落遺跡の、いわば基礎的整理の試みである。その結果、遺跡の分布状況からは、吉ヶ谷式集落は、そのⅠ期からⅢ期を通じて、ほぼ一定の地域単位ごとに展開したとみられ、分布圏全体が台地地帯から丘陵地帯へ移動するような大きな動揺は想定できない。また、個々の集落は、それを構成する竪穴住居跡の平面規模にもとづけば、おおむね５つのタイプに分類できる。それらは時間的先後関係にある場合もあるが、同時に存在するものについては、タイプごとの遺構規模の差からみて、それぞれの集落を構成する集団間のいわば階層差を想定したい。吉ヶ谷式集落の内容は、おそらく従来の予想以上に複雑な状況にあるようだ。

1、はじめに
2、研究史上の吉ヶ谷式集落像
3、編年的整理について
4、地形区分と遺跡分布の概況
5、集落構成の諸類型
6、吉ヶ谷式集落の展開と変遷
7、おわりに

1　は　じ　め　に

吉ヶ谷式土器を主体とする集落、本稿では、これを「吉ヶ谷式集落」と呼ぶ。その実態について、遺された竪穴住居跡をもとに整理を試みる。

吉ヶ谷式土器は、弥生時代後期の東京湾岸一円に想定された「南関東地方」土器様式圏の、外縁部に位置する一小様式とみなされてきた。南関東の沃野に展開する様式圏とは対照的な丘陵地帯中心の立地と、縄文装飾の平底甕に象徴されるおよそ非「南関東」的なスタイルによって、その立場は強く印象づけられてきたといえるだろう。南関東の一大様式圏とは別個の存在とみなされることによって、吉ヶ谷式土器の研究は、独自の研究史を歩んできた。しかし、1965年に標識資料が報告されて以後の四半世紀余りを通観すると、その歩みは断続的で、むしろ低調なまま今日に至っている感はぬぐえない(金井塚1965)。研究史の回顧は次節でおこなうが、1980年代前半、吉ヶ谷式土器とその集落についての論考が相次いで発表された(柿沼1982、石岡1982、井上1983)。それらが当時の資料を見通した成果をもたらし、また未解決の課題をその後にむけて提示したことによって、当時を研究史上の画期とみなすことができる。しかし、後続する研究はふたたび沈黙し、その一方で、発掘調査がもたらす新資料は着々と増加しつづけてきた。

以来10年、かかる状況のうちに蓄積された資料は、吉ヶ谷式集落の立地、構造、遺物にわたる実態が、おそらく従来の認識以上に多様であることをうかがわせる。ところで従来の認識、すなわちこれまでの研究成果にもとづく吉ヶ谷様式の集団像は、その具体像となると、実はごく朦朧とした

もののようにみえる。10年の節目にとりたてて意義は認めがたいが、吉ヶ谷様式研究の枠組は、新資料の蓄積をふまえ、あらためて検討されるべき時期を迎えているとおもわれる。その認識のもとに、吉ヶ谷式集落の実態を把握すべく、あらためて基礎資料の整理から出発したい。

2　研究史上の吉ケ谷式集落像

吉ヶ谷式集落の具体的様相について触れる前に、それをめぐる研究史を概観しておきたい。

吉ヶ谷式をはじめとする小地域様式が、「南関東地方」土器様式圏をとりまく構図の歴史地図は、1970年代後半には広く共有されていたようだ。当時、田村言行がその概要を簡潔に述べているので、一部省略して引用しておく。

「南関東地方における弥生時代後期の土器編年は、中期末の宮ノ台式に続き、久ヶ原式、弥生町式、前野町式と基本的な位置づけがなされ、そのまま時間的に前葉、中葉、後葉とみごとに区分されている。

ところが南関東地方でも地域的にはこの土器編年を必ずしも明確にあてはめることのできない、いわば特有の小文化圏を形成しているものがある。先にあげた大きな流れに対し、特に土器の形態あるいは文様構成などに異質性が認められ、久ヶ原式・弥生町式・前野町式の大文化圏の外周部で、東京湾を大きく取り囲む地域で発見され、各々が小文化圏を形づくる様相がわずかずつ認識されつつある。(中略)それらのなかで、土器の分布する範囲、構成される土器のセット関係、住居址形態などが比較的明らかにされている三つの小文化圏についてスポットをあててみようと思う。

三つとは、神奈川県の朝光寺原式土器文化圏、埼玉県の吉ヶ谷式土器文化圏、それに千葉県の臼井南式土器文化圏である。」(田村1979、P69)

このように局地的「小文化圏」と評価された吉ヶ谷式土器分布圏内部では、近接して分布する櫛描文土器との関係が、研究史の初期段階から問題とされてきた。この「岩鼻式土器」とも呼ばれる櫛描文土器と吉ヶ谷式土器とのかかわりは、編年上の位置関係において、あるいは両者に表象される集団相互の関係において、吉ヶ谷式をめぐるこれまでの論説の共通課題となってきた。あたかも両者一対となって問題意識を喚起してきたところに、吉ヶ谷式あるいは「岩鼻式」をめぐる研究史の特徴を指摘できる。しかし、このように早くから視点が二元化したためか、おのおの個別の具体像を観察し、実態を把握する本来的作業は、ながらく置き去りにされてきたといえるだろう。

そのような状況に画期をもたらしたのは、柿沼幹夫による吉ヶ谷式土器の編年的研究だった。(柿沼1982)その内容については後で触れるが、そこでは「岩鼻式土器」との関係にも言及されている。柿沼は、両者が弥生時代後期初頭から後半にかけて併存し、後期初頭には台地地帯に分布した吉ヶ谷式土器が、以後丘陵地帯に移り、台地地帯の「岩鼻式土器」とは分布域を分かったとみなして「あたかも『住み分け』と形容してもよいような現象」(柿沼1982、P71)と指摘した。吉ヶ谷式土器と櫛描文土器の関係における解釈で、今日なお大きな影響力をもつ「住み分け」モデルである。その構図にのっとって、両者に表象される集団関係を論じたのは大塚実である(大塚1988)。

視点を吉ヶ谷式集落内部にすえた研究は、これまでとりわけ低調だったといえる。が、例外的存在として井上尚明の論考には注目しておく必要がある(井上1983)。井上はそこで、竪穴住居跡の炉

の配置を基準に住居タイプを分類し、その規模、周壁平面形を含め、汎関東的視野で地域性を論じた。つまり対象は吉ヶ谷式集落に限定されず、結果的に、吉ヶ谷式集落の地域性を周辺諸様式との関連のなかに位置づけて評価する論点を提供した。一方、集落内部へ収斂する論点として、炉を複数所有する居住形態の意義が論じられる。その手法、結論はさておき、注目すべきは、遺跡の実態を透して、吉ヶ谷様式集団の具体的あり方に論及している点である。「炉の複数化という現象を一夫多妻という様な婚姻形態と関連付けて考えてみた。」（井上1983、ｐ94）かかる刺激的な論点が、結果的に後続する集落研究を喚起しなかったことはむしろ不思議である。ともあれ井上の論考は、吉ヶ谷式集落研究の嚆矢として、後続する研究の起爆剤となる可能性をもっていたとおもわれる。

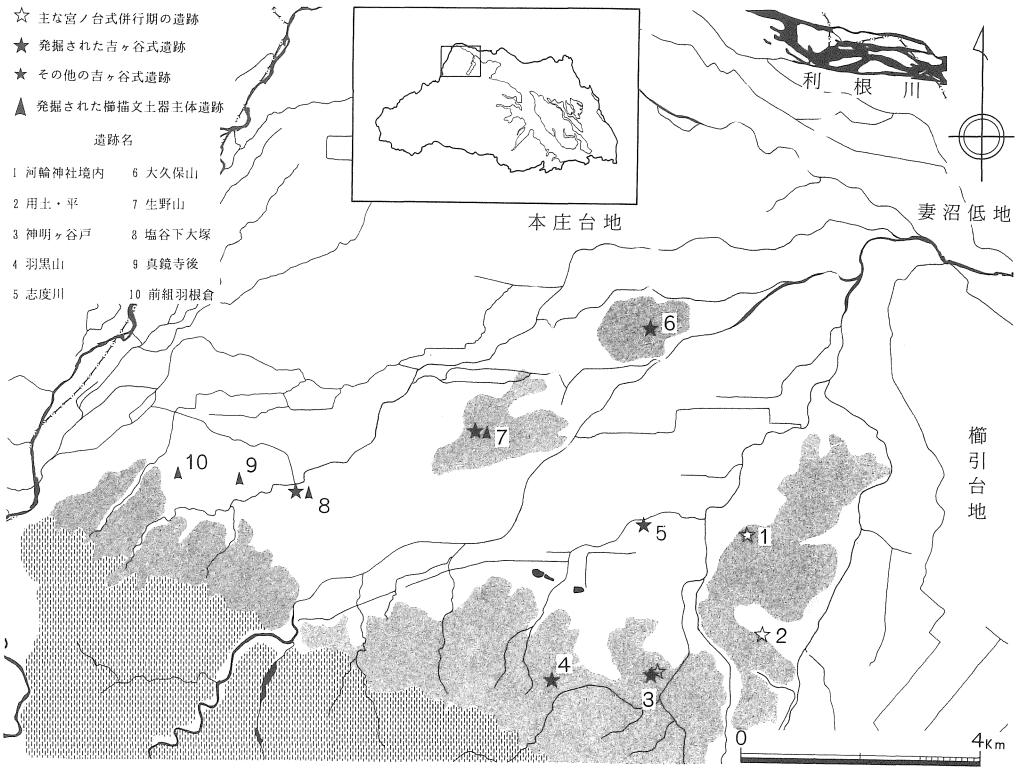
これらの論考が発表されて以後、吉ヶ谷様式を取り巻く研究史的環境には大きな変化があった。伝統的南関東後期弥生土器編年案の破綻すなわち「南関東地方」土器様式圏の解体である。この事態につながる疑義の提出は1970年代前半に遡るが、今日、小地域単位にもとづく土器編年案の再編成が課題であることを、もはやあらためて強調する必要はないだろう。かつて吉ヶ谷式土器編年の考察は、「久ヶ原式―弥生町式―前野町式」編年案との整合が必須であった。それは1980年代前半以前の研究史において、当時は拠りどころに、結果的には軛となってきた。しかし、この型枠は、いまや存在しない。そして一大様式圏が解体した歴史地図においては、大様式圏あっての小様式圏の特殊性は、根拠を失ったといえるだろう。本稿の出発点はそこにある。

3　編年的整理について

集落構成の展開と変遷を整理するには、遺跡の編年的位置づけが根拠となる。その際の基準となる編年観は、基本的に、柿沼幹夫による土器編年案（柿沼1982・1988）に依拠することにする。

柿沼による編年案は、吉ヶ谷式土器の主要器類、とりわけ甕の型式変化をもとにⅠ～Ⅲ期を設定する。Ⅱ期はさらにⅡa・Ⅱb期に細分されるが、それら各期に対応する土器群によって、吉ヶ谷Ⅰ～Ⅲ式土器の内容を提示している。現状では３期区分だが、Ⅱ期を細分した措置に示されるとおり、資料の制約から見送られたが、本来４期区分が志向されている。1980年代初頭当時の資料不足も手伝って、甕を除く器類の形式細分あるいは型式変化の説明が不十分なため、吉ヶ谷Ⅰ～Ⅲ式の設定の手続がやや唐突にみえるが、甕の型式変化の分析は、細分の根拠となる説得力が認められる。本稿においては、この柿沼編年吉ヶ谷Ⅰ～Ⅲ式にそれぞれ対応するⅠ～Ⅲ期をもって、時期区分をおこなう。Ⅱａ・Ⅱｂ式に相当する区分は、Ⅱ(古)期・Ⅱ(新)期とする（註１）。ただし、柿沼が自説の有効性を検証するために用いた南関東土器編年案との対比は、前節で触れたとおりその編年案が無効となった今日、もはや意味をもたない。吉ヶ谷式土器自体の型式変化に関する見解の有効性を認め、本稿がこれに依拠していることを確認しておく。

ところで、現在もなお、吉ヶ谷式土器の系譜を弥生時代中期に遡ることはできない。その可能性は、次節で触れるとおり妻沼低地で見いだされつつあるが、中期との接点の状況は、いまだ不明である。現状では、吉ヶ谷Ⅰ式を後期初頭に位置づけられるかは断定できない。つまりⅠ期の初頭が、後期初頭にあたるとは限らない。一方、吉ヶ谷Ⅲ式には、小型器台、小型高杯、東海系内彎壺・有稜高杯がともなう。吉ヶ谷様式とそれら新出の外来系器種との関係の整理、すなわち吉ヶ谷Ⅲ式土



第１図　主要遺跡分布図（１）　―― 荒川左岸 ――

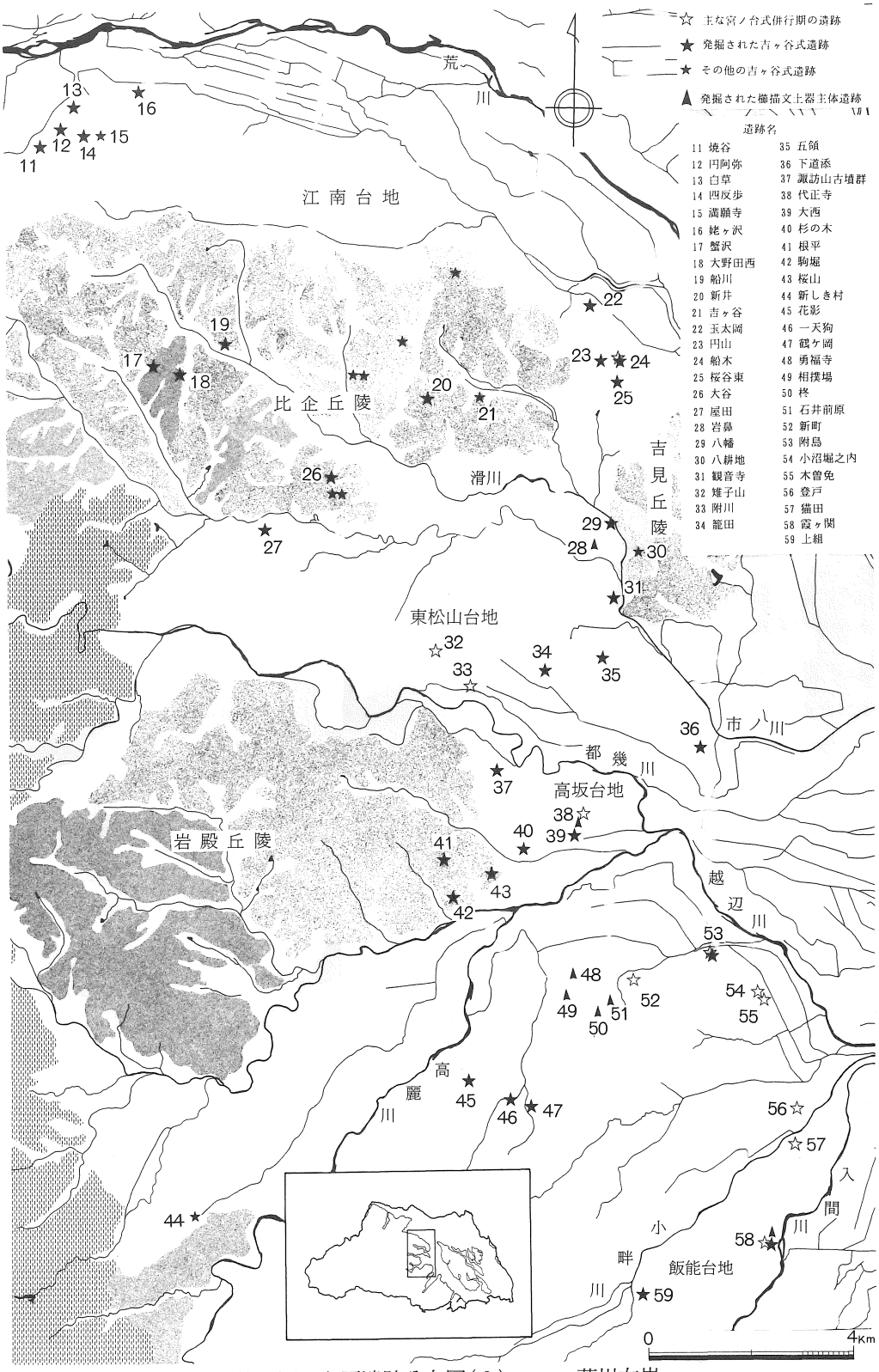
器の実態の吟味は、今後にかけての重要課題だろう（註２）。いうまでもなく弥生土器と古式土師器の境界の問題に関わるからだが、現在吉ヶ谷III式とされる土器群は、弥生時代の吉ヶ谷様式からは峻別されるべき可能性を含んでいる。つまりIII期は古墳時代初頭にかかる可能性がある。

次節以下において、Ⅰ～III期の時期区分のもとに吉ヶ谷式集落の展開を整理していくが、これを弥生時代後期集落史にあてはめれば、以上述べたとおり、前後にズレが生じうることになる。

4　地形区分と遺跡分布の概況

吉ヶ谷式集落の分布圏は、埼玉平野西辺の丘陵・台地一帯にわたっており、近年では、それが沖積低地におよぶことが明らかになってきた。赤井戸式土器との関連をさておけば、その北限は、利根川・神流川に沿う群馬県境、南限は、目下のところ入間川左岸付近である。分布圏内の地形は起伏に富み、その状況は地形区分によって整理されている（註３）。以下、それにもとづき遺跡分布の概況を述べていく（第１、２図）。

①妻沼低地：荒川左岸の低地地帯では、従来吉ヶ谷式土器の散発的な出土は知られていたが、深谷市明戸東遺跡F区〔II（新）～III期〕で16基の竪穴住居跡が発掘され、沖積低地に立地する吉ヶ谷式集落の実態が明らかになった。今後、さらなる類例の増加が期待される。なお、須和田式期の集落遺跡



第2図　主要遺跡分布図(2)　――荒川右岸――

として注目された行田市池上遺跡の環濠出土土器を分析した中島宏は、口縁部から胴上半部を縄文で飾る甕「４類」を、吉ヶ谷式土器の祖型と評価した（中島1984、Ｐ283)。それに続く宮ノ台式併行期の様相はいまだに不明だが、吉ヶ谷式土器の係累を遡るうえで、妻沼低地には注目していく必要があるだろう（註４)。

②本庄・櫛引台地（荒川左岸北武蔵台地)：妻沼低地西部一帯の台地地帯を指す。

遺跡は、主として山地縁辺から台地に突出するように展開する丘陵上に立地する。中期宮ノ台式併行期の集落遺跡は、美里町神明ヶ谷戸遺跡で環濠と竪穴住居跡８基、寄居町用土・平遺跡で竪穴住居跡12基が出土している。後期集落には、吉ヶ谷式集落と、児玉町真鏡寺後遺跡のように樽式土器を主体とする集落がある。吉ヶ谷式集落は、美里町羽黒山遺跡〔III期〕で竪穴住居跡５基、同町神明ヶ谷戸遺跡で３基、同町生野山遺跡で２基など、比較的小規模な発見例が知られている。本庄台地一帯の弥生時代遺跡については恋河内昭彦の総括に詳しく(恋河内1992)、それによれば、1991年までに発見された吉ヶ谷式集落は、いずれもIIb期以降に属するという。

③江南台地（荒川右岸北武蔵台地)：比企丘陵北縁の台地である。

大規模開発にともなう事前調査によって、後期の集落が台地北縁西部で集中的に発見されている。これらの遺跡は、隣接する遺跡とは500m前後の距離をおいて東西2.5km、南北１kmの範囲に分布している。吉ヶ谷式集落は、川本町白草遺跡〔II期〕で竪穴住居跡21基、同町円阿弥遺跡〔II(新)期〕で５基、同町四反歩遺跡〔II(新)期〕で４基が確認されており、いずれも周囲の全面発掘によって集落が完掘されている。ほかに同町焼谷遺跡〔II(新)期〕で竪穴住居跡７基、江南町姥ヶ沢遺跡で８基が発掘されている。川本町万願寺遺跡〔II(新)期〕では一括出土土器が報告されており、やはり集落遺跡の存在が予想される。姥ヶ沢遺跡の東600mに位置する江南町富士山遺跡は、櫛描文土器を主体とするらしく、８基の竪穴住居跡が検出されている（註５)。

④比企・吉見丘陵：北を和田川、南を市野川に限られる丘陵である。大小の谷地が複雑に入り込み、起伏に富んだ景観を呈している。

宮ノ台式期の遺跡は、丘陵の狭間にあたる、荒川に面した台地縁部にみられ、大里村船木遺跡では竪穴住居跡３基と方形周溝墓３基、礫床墓１基、隣接する同村円山遺跡で竪穴住居跡３基と方形周溝墓１基が出土している。吉ヶ谷式集落は、東から順にみていくと、船木遺跡〔II(古)期〕で竪穴住居跡３基、背後の台地高位部に立地する大里村桜谷東遺跡〔III期〕で３基、同村大境遺跡で11基出土している。後２者は、近年の調査により集落が完掘されたものである(註６)。船木遺跡の北西1.5kmに位置する東松山市玉太岡遺跡〔Ｉ～II期〕では、道路路線内の限られた調査ながら、竪穴住居跡９基以上と、北接して方形周溝墓とみられる溝群が確認されており、比較的規模の大きな吉ヶ谷式集落の存在が予想される。丘陵部東端の吉見丘陵では、吉見町八耕地遺跡で出土した土器が知られている。また、丘陵東部南辺の台地上では、東松山市八幡遺跡で集落跡が検出されており、その西隣には、櫛描文土器主体集落として著名な東松山市岩鼻遺跡がある。丘陵中央部では、滑川両岸からやや奥まった谷沿いに遺跡が点在する。標識遺跡である東松山市吉ヶ谷遺跡〔II(新)期〕はここに位置している。工事にかかり発見された竪穴住居跡からは、標識資料である一括土器群がもたらされた。その西１kmに位置する滑川町新井遺跡〔III期〕では、竪穴住居跡13基、また滑川町大

谷遺跡〔II(新)期〕では竪穴住居跡2基が出土している。丘陵東部の滑川上流域では、左岸の滑川町船川遺跡〔Ⅰ期〕で竪穴住居跡3基、右岸丘陵上の嵐山町大野田西遺跡〔II～III期〕で同じく25基が出土している(註7)。大野田西遺跡は、集落が調査範囲外へ広がるとみられ、遺構の重複が顕著なことから、継続的かつ大規模な集落遺跡として注目される。その西600mに位置する嵐山町蟹沢遺跡〔III期〕は、南隣する市野川流域に属し、竪穴住居跡11基からなる集落が完掘されている。

⑤東松山台地：北を市野川、南を都幾川に限られた台地である。

宮ノ台式期の集落は、東松山市雉子山遺跡で竪穴住居跡3基、同市附川遺跡で1基が検出されている。吉ヶ谷式集落は、東松山市五領遺跡C区、同市篭田遺跡〔III期〕で竪穴住居跡1基、嵐山町屋田遺跡〔II(新)期〕で竪穴住居跡4基出土している。台地東端に位置する観音寺遺跡〔Ⅰ期〕では、方形周溝墓の主体部に鉄剣と銅釧が副葬されていたことが確認された。台地東部は東松山市の中心部として市街化が進んでおり、状況不明の部分が多いとみられる。

⑥岩殿丘陵：北は都幾川、南は越辺川に面する丘陵で、台地地帯を南北に分けるように、山地から東へ突出している。

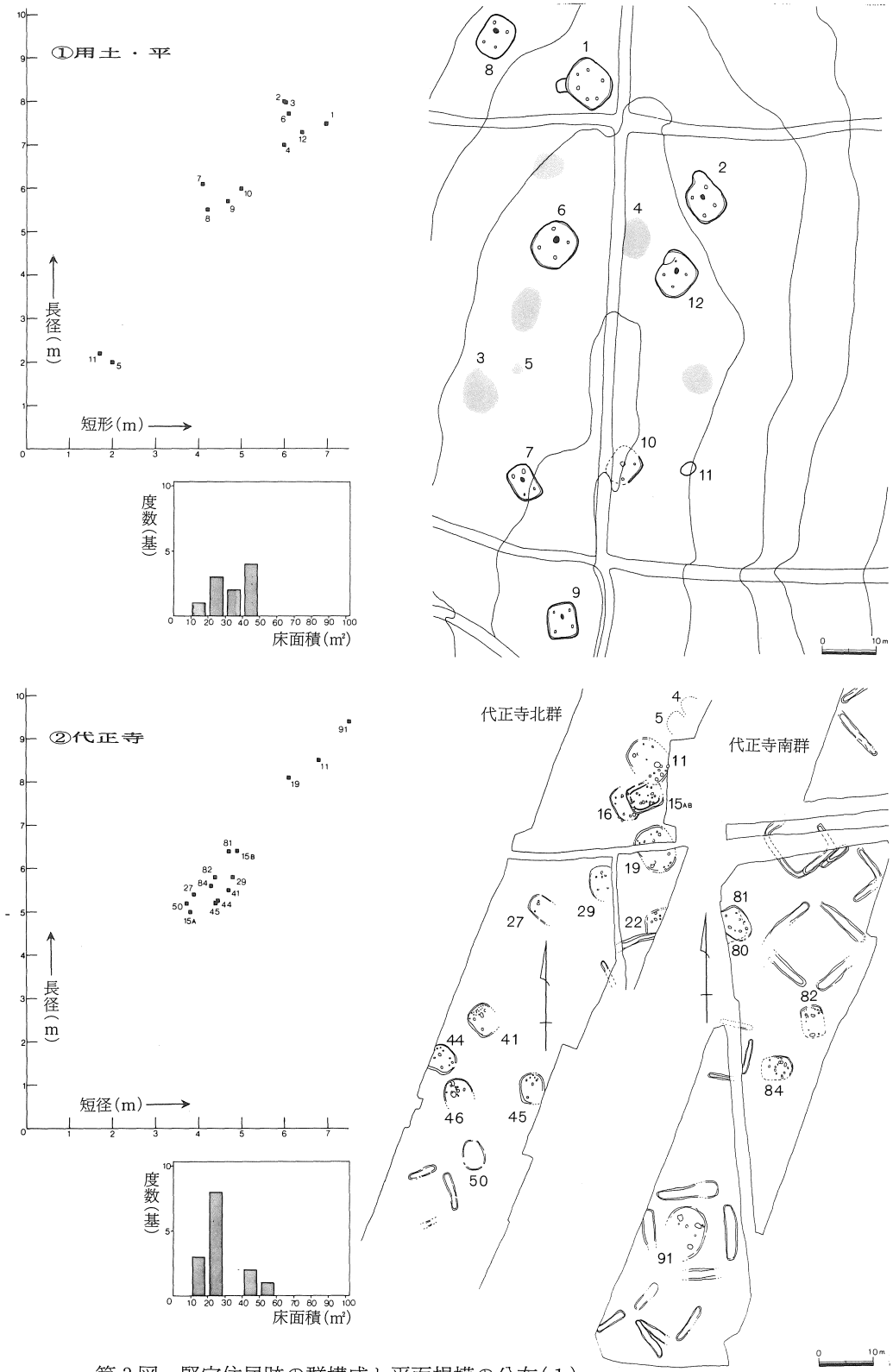
越辺川と高麗川の合流点に近い、丘陵南部の尾根上で吉ヶ谷式集落が検出されている。東松山市駒堀遺跡〔II～III期〕では竪穴住居跡14基と方形周溝墓1基、その東900mの同市桜山遺跡〔III期〕で竪穴住居跡3基、両者と1km未満の距離をおき、さらに高所に位置する同市根平遺跡〔III期〕で竪穴住居跡6基が確認されている。駒堀遺跡と根平遺跡は、ともに1970年代に集落が完掘され、その成果によって著名である。

⑦高坂台地：岩殿丘陵東辺に接し、越辺川と都幾川の合流点を東に臨む、東西2.5kmの台地である。

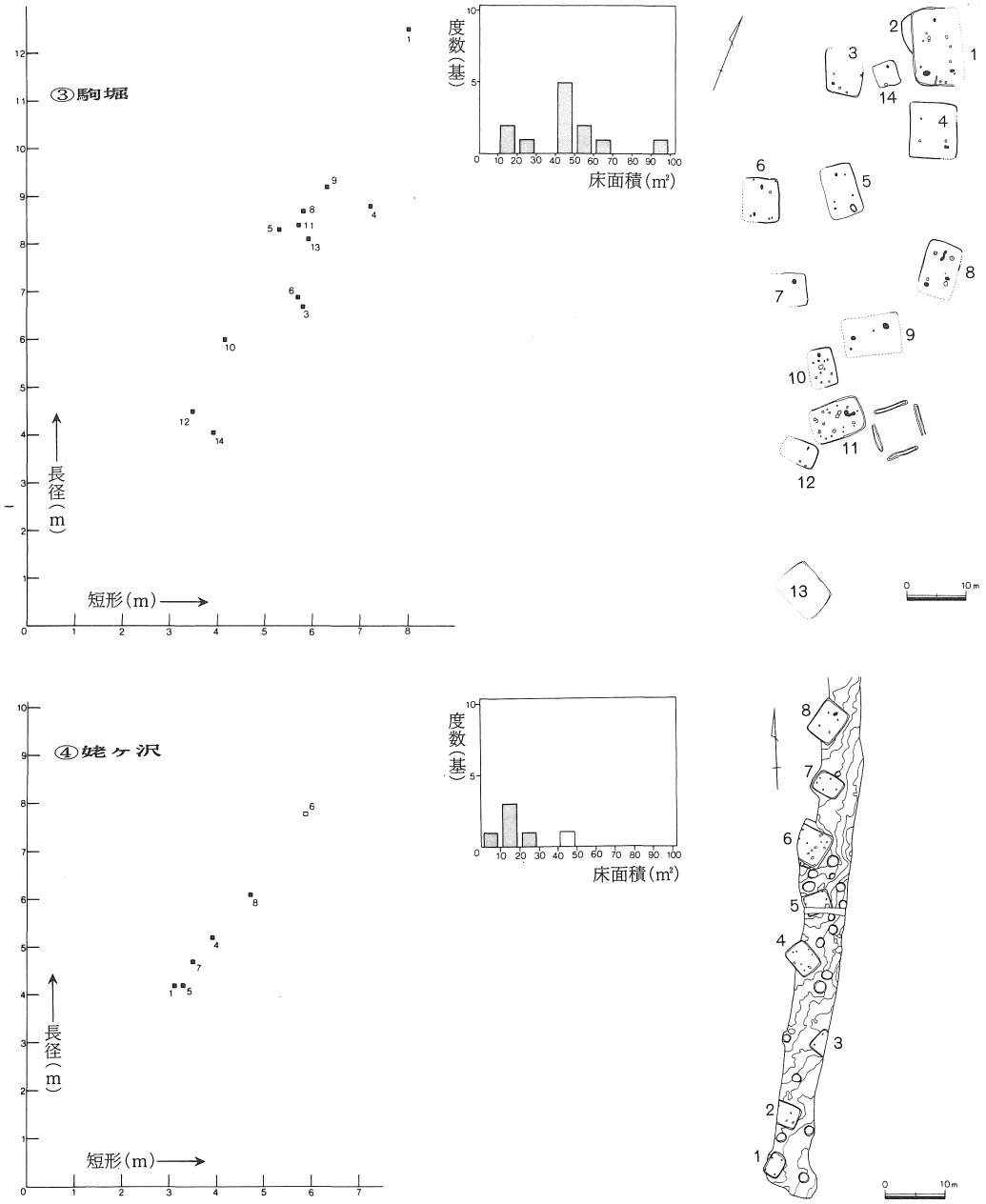
宮ノ台式期の拠点集落とみられる東松山市代正寺遺跡が、台地東端部に立地している。吉ヶ谷式集落は、代正寺遺跡に隣接する東松山市大西遺跡〔II～III期〕で竪穴住居跡14基以上、台地南辺の同市杉の木遺跡〔Ⅰ期〕で4基、また台地北辺に立地する東松山市諏訪山33号墳の調査に際しては、墳丘下層から竪穴住居跡〔II(新)期〕が検出されており、諏訪山古墳群造営に先行して、吉ヶ谷集落が存在したことが示されている。

⑧毛呂・坂戸台地：入間台地のうち、越辺川と小畔川に挟まれた部分を指す。北東部を中心に、遺跡が比較的密に分布している。

宮ノ台式併行期の遺跡は、拠点集落とみられる坂戸市附島遺跡が、台地北東端に位置している。これまでの発掘調査で7基の竪穴住居跡のほか、土壙、方形周溝墓が出土した。ほかに坂戸市木曽免遺跡、同市新町遺跡、同市塚越渡戸遺跡で竪穴住居跡、同市小沼堀之内遺跡で壺棺墓が発掘されているが、どれもごく部分的な調査によるもので、遺跡内容の大半は未知である。これらは附島遺跡周辺の台地縁辺に立地し、分布のいわば核地域を形成している。例外的なのは川越市登戸遺跡で、小畔川に面する台地南東端部に位置し、竪穴住居跡5基が出土している。後期の遺跡は、中期遺跡の周辺からさらに台地内奥にかけて発見されており、吉ヶ谷式集落とともに、櫛描文土器を主体とする集落遺跡が分布する。吉ヶ谷式集落は、坂戸市鶴ヶ岡遺跡〔III期〕で竪穴住居跡4基、附島遺跡〔II期〕で2基、鶴ヶ島市一天狗遺跡で2基、小屋遺跡〔III期ヵ〕で1基、坂戸市花影遺跡〔Ⅰ期〕では方形周溝墓8基が出土している。遺構は不明だが、土器がまとまって出土した坂戸市新し



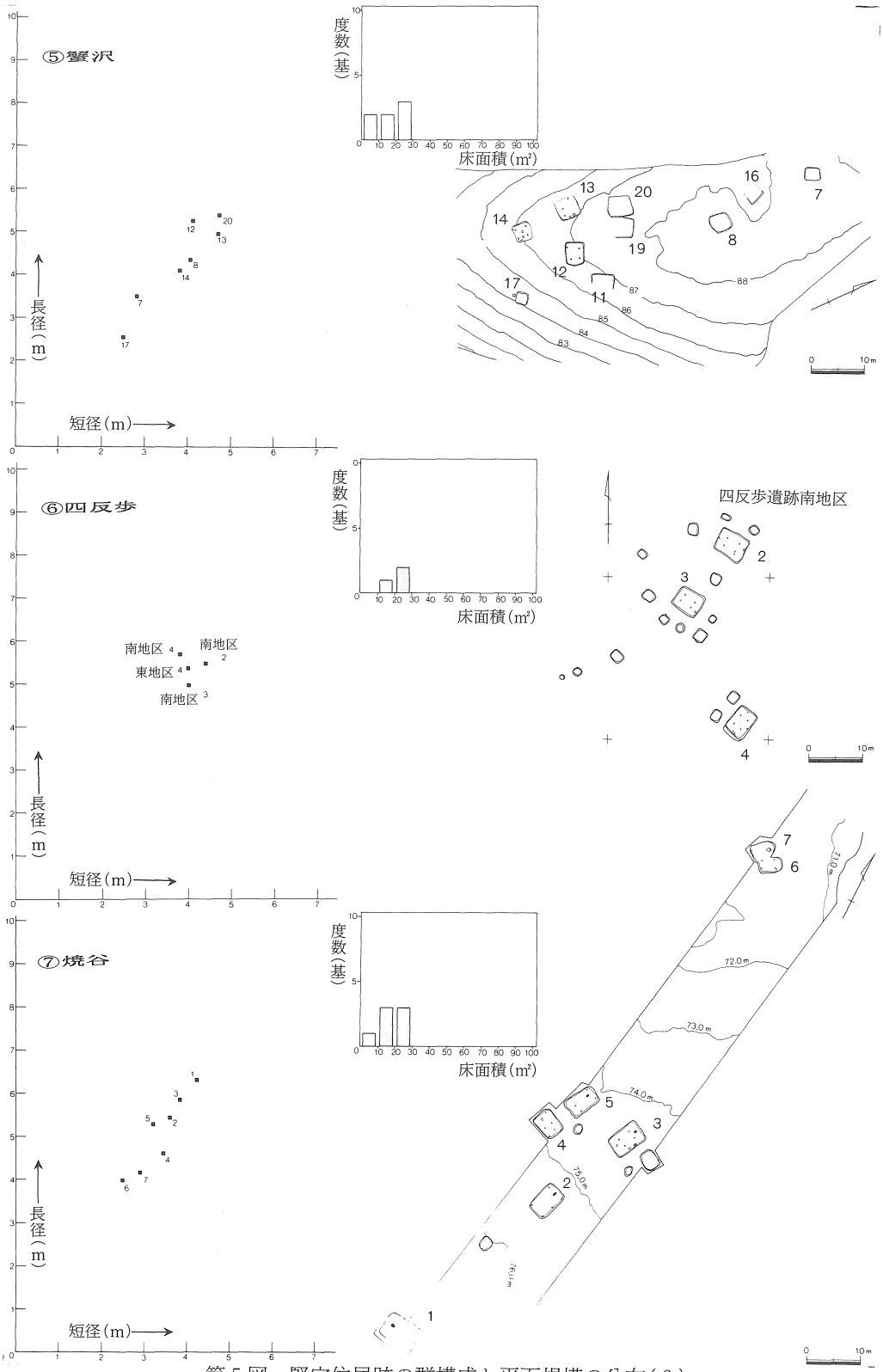
第3図　竪穴住居跡の群構成と平面規模の分布(1)



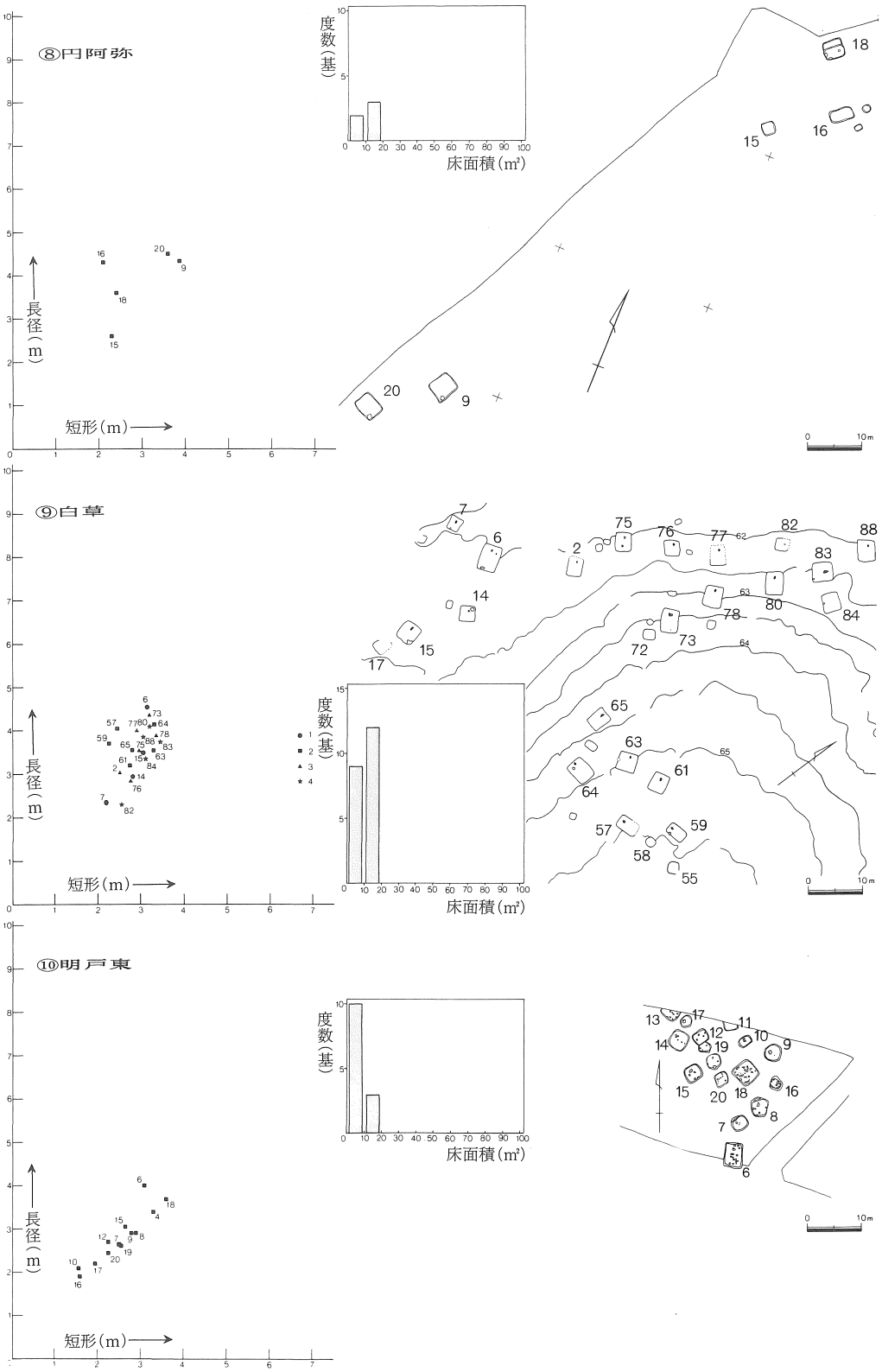
第４図　竪穴住居跡の群構成と平面規模の分布（２）

き村遺跡〔III期〕は、毛呂台地最奥部に位置し、吉ヶ谷式集落が、山地のほど近くにも分布することを示している。一方、櫛描文土器主体集落は、坂戸市相撲場遺跡で竪穴住居跡３基が確認されているのを最高として、同市勇福寺遺跡、同市石井前原遺跡、同市柊遺跡などで出土している（註８）。

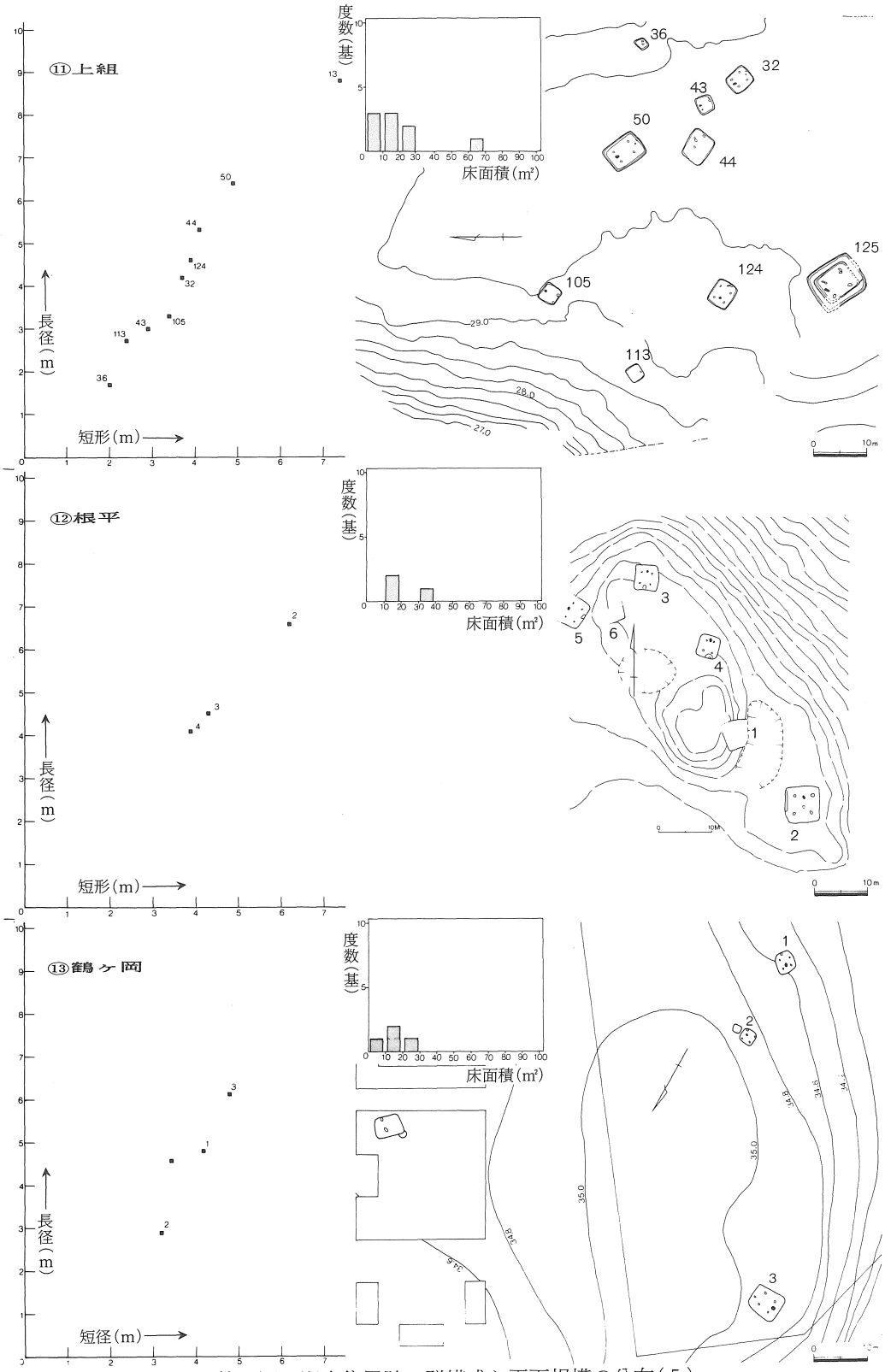
⑨飯能台地：入間台地南辺部、小畔川と入間川に挟まれた部分を指す。本稿で対象とする地域の南限にあたる。宮ノ台式併行期集落は、川越市霞ケ関遺跡第３次調査で検出されているが、成果は未詳である。後期集落は、同じ霞ケ関遺跡第１・２次調査で吉ヶ谷式集落〔Ⅰ期〜〕が、第３次調査



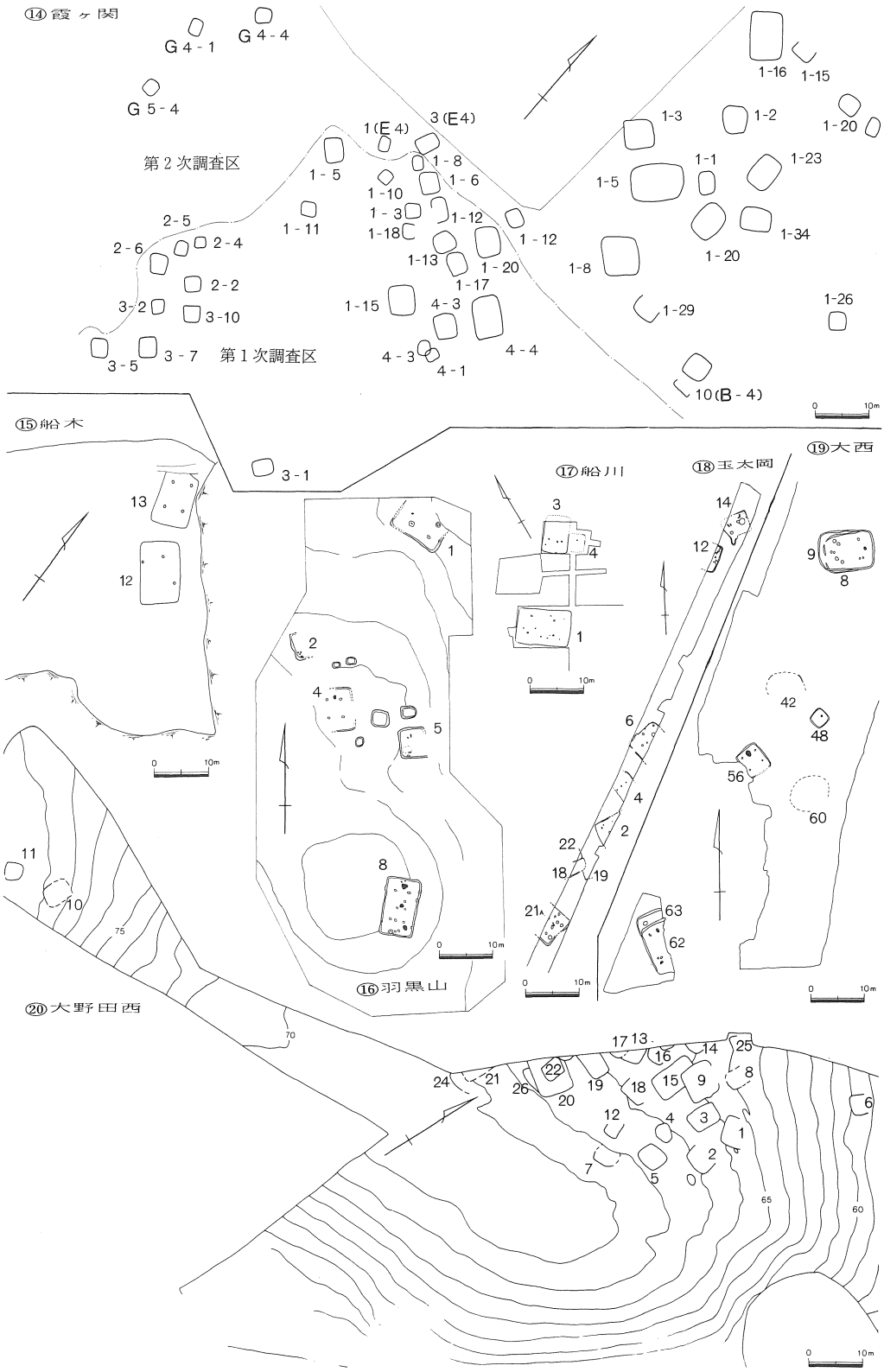
第5図　竪穴住居跡の群構成と平面規模の分布(3)



第6図　竪穴住居跡の群構成と平面規模の分布(4)



第７図　竪穴住居跡の群構成と平面規模の分布（５）



第8図　その他の遺跡における竪穴住居跡の群構成

で櫛描文土器主体集落が検出されている。吉ヶ谷式集落は、竪穴住居跡45基が出土しており、これまで確認されているなかでは最大規模である。ほかに川越市上組遺跡〔III期〕では、竪穴住居跡9基からなる吉ヶ谷式集落が完掘されている。

5　集落構成の諸類型

吉ヶ谷式集落遺跡のなかには、全面的な発掘調査によって、居住域全体の構成がほぼ明らかにされた例がいくつかある。それらをみていくと、規模を異にする竪穴住居跡の組みあわせからなる集落構成は、一様でないことがわかる(註9)。その内容をごくおおまかに整理すると、現状では以下の類型が認められる。番号を用いてその名称としておく。

1タイプ：床面積40m²以上の大型竪穴住居と、20～30m²の中型竪穴住居で構成される集落。

2タイプ：主に40m²以上、大型の竪穴住居で構成される集落。40m²～60m²に集中が認められる。

3タイプ：主に10m²以上30m²未満、中型の竪穴住居で構成される集落。

4タイプ：20m²未満、小型の竪穴住居で構成される集落。10m²未満のものも多い。

5タイプ：10m²前後から40m²以上まで竪穴住居の規模のばらつきが比較的大きい集落。

次に、それぞれのタイプについて、実例を通して実態を観察していきたい。なお、基礎資料を第3～8図に図表化した。遺跡ごとに、左に周壁平面形にもとづく竪穴住居跡平面規模の分布図、中央に床面積にもとづく竪穴住居跡規模の度数分布図、右に遺構配置図である。遺構の遺存状況が芳しくなく、必要な情報が得られない標本は、分布図に含めていない。ただし姥ヶ沢遺跡6号住については、論述の必要上例外的に、推定値をもとに図表に加えた。遺構配置は、各調査報告書に掲載された図にもとづいて作成し、対象外の遺構は省略した。なお駒堀遺跡については、全体図に個別遺構平面図を合成して作成した。

吉ヶ谷式集落を巡見する前に、それらに先行する宮ノ台式併行期集落の状況をみておきたい。集落のほぼ全容が明らかにされた例として、寄居町用土・平遺跡（第3図①）がある。遺跡は独立丘陵上に立地し、1954～1983年にかけての8回にわたる調査で、10基の竪穴住居跡と、2基の方形竪穴が発掘された。さらに3基の遺構の存在が確認されている。遺構は重複せず、出土土器からも、ほぼ一時期の集落遺跡とみられる。竪穴住居跡は、周壁平面形が長方形と隅丸方形のものとある。長方形は、床面積30m²未満の、相対的に小型の遺構に多く、30～50m²の大型遺構は、隅丸方形が主体である。規模の分布にきわだった偏りは認められないが、この大小2群がそれぞれまとまりを示している。方形竪穴は、「倉庫状竪穴遺構」と命名されたとおり貯蔵施設と推定されている。4m²以下で、床面に柱穴や炉の痕跡をもたない。

東松山市代正寺遺跡（第3図②）は、1987～90年の発掘調査によって、多数の竪穴住居跡と方形周溝墓が検出された。調査範囲は、遺跡を南北に縦断する道路用地内に限られるため、遺跡の全体像は明らかでないが、該期集落では県内最大級の調査例である。居住域と墓域が一部で重複しており、集落の構成は、数次にわたって大きく変化したとみられる。竪穴住居跡は2群にまとまり、南北に約300m隔たって分布している。遺物をともない帰属時期がうかがえる遺構に限ると、南群で5基、北群で15基確認できるが、全体に保存状態が悪く、帰属不明となっているもの、もしくは消滅した

遺構も少なくないだろう。そのため、集落構成を小期ごとに分離して復原するのは、現状では難しい。竪穴住居跡の周壁平面形は、小判形と隅丸方形の２者がある。規模の分布は20m²台への集中が顕著で、ほかに40m²を越すものが少数ある。南北２つの群ともこの傾向は共通し、さらに群内では、大小ごとに配置がまとまるようである。隣接する未調査部分の状況の把握と、集落変遷の細別作業を残しているが、これが本来のあり方か、あるいは大型住居の比率がなお高く、用土・平遺跡とほぼ同じ状況である可能性もあるだろう。最大の91住は、床面積59m²である。

この他、雉子山遺跡、附島遺跡、霞ケ関遺跡などで集落の一部が調査されているが、まとまった成果が報告された例は、吉ヶ谷式集落の分布圏内では、この２遺跡にとどまっている。

つぎに、吉ヶ谷式集落の最大例である霞ケ関遺跡（第８図⑭）について触れておく。調査報告書が未刊のため、出土土器の一部が公にされている（柿沼1982）ほかは、成果の詳細はほとんど不明である。よって、前述の諸タイプとの対比もここではできないが、知られている概略を整理しておきたい。立地は、入間川に面する標高約20mの飯能台地先端部、1966年の第１、２次調査で、吉ヶ谷式集落とされる竪穴住居跡45基前後、1971年の第３次調査では、宮ノ台式期集落と後期櫛描文土器主体集落が出土しているという。遺構配置図によると、竪穴住居跡は概ね３群のまとまりをみせており、重複はほとんどない。そして群ごとに、遺構の規模分布が異なるようである。すなわち、北西に寄る第２次調査１区の群は、相対的に大・中・小型の竪穴住居跡からなるが、その南西に接する第１次調査１区および周辺の群では中・小型、さらに南西に位置する第１次調査２・３区から北にかけての群では小型の竪穴住居跡が主体となっている。出土土器は型式細分されており（柿沼1982)、これらの遺構群は、数次にわたる変遷の結果とみられる。見かけの異なる３つの群が、細別される小期に対応するかはわからない。当遺跡は、吉ヶ谷式集落の変遷をたどる上で、標識的な存在となる可能性が期待される。全容の分析は焦眉の課題といえるだろう。なお第２次調査１区16住は床面積80m²を越えるとみられ、駒堀遺跡１住などとともに、最大級の遺構のひとつである。

つぎに吉ヶ谷式集落各類型の実際例だが、１タイプの集落は、現在のところ好例をあげられない。むしろ先にみた中期の２例がその状況を示している。吉ヶ谷式集落では霞ケ関遺跡の１部がこれにあたる可能性があり、今後の類例の発見にそなえ設定しておく。

２タイプ集落の典型例は、東松山市駒堀遺跡（第４図③）のうちII期に属する集落である。遺跡の立地は、岩殿丘陵南辺の尾根上で、標高60～62m、低地との比高差は39mである。1971年の発掘調査により、竪穴住居跡14基と方形周溝墓１基が出土した。遺跡最奥の尾根頂部付近には最大規模の１、４住が立地し、その南100mにわたり集落が展開する。竪穴住居跡の周壁平面形は、長方形が優勢だが、方形、正方形のものもある。床面積40m²を越えるものが多く、10～20m²のものはむしろ少ない。このうち１号住は95m²で、吉ヶ谷式集落では目下最大の遺構である。出土土器の内容を考慮すると、これらは３時期には分けられるだろう。すなわちII(古)期の５住を含む一群、同じくII(新)期の11住を含む一群、そしてIII期の１、４、６、14住などからなる群である（註10)。順にそれぞれA～C群と仮称しておく。ただし、各遺構における遺物の出土状況の詳細が不明であり、また遺物が僅かで帰属を確定できない遺構もあるため、小期ごとの集落構成は確定が難しい。そこでA・B群それぞれの確定は控えておくが、３群とも５基前後の竪穴住居跡からなると推定される。群の構

成を比較すると、A・B群は、それぞれ40～60m²未満の竪穴住居跡３、４基と、10～30m²未満の１、２基からなるのに対し、C群は16～95m²の幅で規模のばらつきが大きく、偏りは認められない。すなわちII期に属するA・B群は２タイプ、III期のC群は５タイプといえるだろう。竪穴住居跡の周壁平面形は、A・B群が長方形主体なのに対し、C群は、１号住を除き方形あるいは正方形である。時期が下るとともに遺構の平面形態にも相違が認められる。

３タイプの集落には、蟹沢遺跡（第５図⑤）、四反歩遺跡（同図⑥）がある。焼谷遺跡（同図⑦）もこれにふくまれる可能性がある。蟹沢遺跡は、比企丘陵の東部、標高83～89mの尾根上に立地する。1990年の発掘調査で、竪穴住居跡11基、土壙１基が出土した。一部で遺構が重複するが、III期の集落である。周壁平面形が概ね遺存していた７基は方形、正方形を基調とする。床面積30m²を越えるものはなく、15～25m²に偏在する。半壊していた遺構を考慮しても、この傾向は、おおむね変わらないだろう。10m²未満の遺構２基には柱穴、炉の痕跡が認められないが、より大きい遺構でも同様なものがある。四反歩遺跡は、江南台地の北辺、標高68mの東緩斜面部に立地する。南地区で竪穴住居跡３基と土壙15基、北に60m隔たって、東地区で竪穴住居跡１基が出土した。周壁平面形はいずれも長方形である。規模の分布は床面積20～25m²にほぼ集中している。出土土器からII（新）期に位置づけておく。

４タイプの集落には、白草遺跡（第６図⑨）、円阿弥遺跡（第６図⑧）、明戸東遺跡F区（第６図⑩）などがある。白草遺跡は、江南台地北辺に立地する。標高61～66.5m、低地との比高差は約２mである。1989～90年の発掘調査で竪穴住居跡21基、竪穴状遺構７基（註11）、土壙16基が出土した。竪穴住居跡の周壁平面形は長方形、方形が基調で、正方形に近いものもある。規模は床面積20m²を越えず、10m²未満のものも多い。柱穴はほとんど確認されないが、炉は設置されている。集落を分析した礒崎一は、遺構の配置と調査時の所見にもとづき、これらを第１群：６、７、14、15住、第２群：57、59、61、63、64、65号住、第３群：２、73、75、76、77、78住、第４群：80、82、83、84、88住の４群に分けている。遺構規模の分布は各群ともほぼ一致しており、群間に格差は認められない。出土土器のうち、甕などに新旧の型式を認め、２～３段階の小時期差が想定されているが、II期に含まれる。遺構に重複はみられず、配置は全体にわたり比較的整然としていることから、時期差を含むとしても一定の秩序の下に造営された集落遺跡だろう。明戸東遺跡F区は、妻沼低地の微高地上に立地する。標高30～32m。低地の吉ヶ谷式集落としてきわだった存在であることは前に触れた。1984年の調査で16基の竪穴住居跡が出土した。南北に未調査部分を残すが、周辺の地形からみて集落の大半は発掘されたようだ。遺構は全体に密集し、一部で重複していることから、時間差を含むとみられる。竪穴住居跡の周壁平面形は、方形、円形が主である。規模は床面積12m²の６号住を最大とし、主体は10m²未満である。白草遺跡とともに４タイプの典型例となる可能性が高いだろう。II（新）～III期に位置づけられる。

.５タイプの遺跡の好例は、上組遺跡（第７図⑪）と根平遺跡（第７図⑫）である。上組遺跡は飯能台地の北辺に立地し、霞ケ関遺跡の西南西2.5㎞にあたる。標高29m、低地面との比高差は３mである。1972年と1985年の発掘調査で、竪穴住居跡16基、土壙２基、方形周溝墓２基が出土した。竪穴住居跡は、吉ヶ谷式土器もしくはその係累をひく土器をともなうものと、ハケメ台付甕をはじ

め非吉ヶ谷式土器のみのものがある。両者が時間的に截然と分離するとは断じ難いが、とりあえず前者に属する9基を抽出して扱うことにする。吉ヶ谷式集落終末期の一例といえるだろう。竪穴住居跡の周壁平面形は、大・中型では方形、10m²以下の小型では正方形に近くなる。最大の125号住は建て替えの痕跡を残し、それによって、32m²から67m²に拡張されたことがわかる。他の遺構はいずれも30m²未満で、最小の36号住は3m²である。36号住はごく小規模だが、炉を有することから住居跡とみなしておく。遺構の配置をみると、相対的に大・中型の125住、44住、50住が台地平坦部の中心に、他の小型の遺構はその両翼に位置している。根平遺跡は、岩殿丘陵の南東尾根上に立地する。標高55m、低地との比高差20mである。1975年の発掘調査で6基の竪穴住居跡が出土した。4住からは小型器台、内彎口縁壺を含む一括土器が出土し、吉ヶ谷III式の標識的な資料として知られている。上組遺跡同様、III期の好例といえるだろう。竪穴住居跡の周壁平面形はほぼ正方形である。最大の2号住は39m²で、他はおおむね20m²前後とみられる。最小の4号住は15m²である。遺構の配置は、2号住が尾根の先端に立地し、他は稜線に沿うように並ぶ。とりわけ2、1、4、3号住は、12mの等間隔で1列に整然と配置されており、集落造営時の計画性を示している。このほかに、先にみた駒堀遺跡のC群、そして根平遺跡よりさらに小規模だが、鶴ヶ岡遺跡（第7図13）も5タイプに属するといえるだろう。

6　吉ケ谷式集落の展開と変遷

本節では、第4、5節でみてきた吉ヶ谷式集落の分布、そして集落構成の諸類型について、編年上の整理を主体として、まとめを試みたい。

まず分布からみた集落の展開について。I期の集落は、吉ヶ谷式集落全体の調査例が増加しているのに対し新たな発見例に乏しく、少なくとも台地・丘陵地帯においては、II期以降の集落に比べ遺跡数が少ない状況にある。立地は荒川西岸低地に臨む低位台地縁部を選ぶ傾向にあり、船川遺跡（第8図⑰）のように丘陵地帯に立地する例は、現状ではむしろ例外的である。この選地は宮ノ台式併行期集落と共通しており、初期の吉ヶ谷式集落が、直接的系譜の吟味はさておくとして、宮ノ台式併行期集落の生活圏をほぼ継承していることを示している。それとともに、I期の集落が荒川沿岸から東にかけての広大な低地地帯に直面していることは、台地・丘陵地帯では依然実態不明な吉ヶ谷様式の揺籃期が、低地地帯と深く関わっている可能性を示唆している。その当否は今後の調査の伸展に俟つほかないが、既に池上遺跡環濠4類土器の存在によって、予告はされているといえるだろう。II期の集落になると、本庄台地から飯能台地にかけての各地で遺跡が確認される。さらに明戸東遺跡F区の調査によって、妻沼低地もその分布圏に含まれることが明らかになった。一方、従来注目されてきたとおり丘陵上にも遺跡は展開し、I期の集落に比べ分布域は拡大している。そしてIII期の集落はII期の状況をほぼ引き継いでおり、比企丘陵東部あるいは岩殿丘陵などでは、丘陵高位部への積極的な進出がうかがえる。このようにII・III期の集落は、丘陵地帯に進出しながら、I期の集落と同様台地地帯にも分布することが、近年来の調査例によって確認できる。第2節でみたように、柿沼による「住み分け」モデルは、II期以後の集落が立地を丘陵地帯に移動させることにより成立したと説明されるが（柿沼1982、p71）、吉ヶ谷式集落が従来の領域を櫛描文土器主体集

落（＝「岩鼻式」集落）にあけ渡したと解釈できるような、広域的な変動の痕跡は認めがたい（註12）。

遺跡分布図にはなお多くの虫食いが含まれるだろうが、地図上には、帰属時期の異なる遺跡を含むいくつかの集中分布地域が認められる。そこからは、吉ヶ谷式集落の展開が、第3節で用いた地形区分よりさらに細分された空間を領域とするグループ単位に把握されること、各グループの遺跡分布範囲は、最大幅2～3kmほどであることが、おぼろげながらうかがえる。Ⅰ～Ⅲ期を通じての変遷がたどれるのは、比企丘陵東部、同西部、高坂台地・岩殿丘陵など限りがあるが、その差違は、今後新たに発見される遺跡によって解消されていく可能性もあり、ここで問題にするのは見送っておきたい。

つぎに集落構成について。前節では、個々の集落遺跡を、竪穴住居跡群の規模構成にもとづいて5つのタイプに類型化した。その編年的動向を整理しておく。

Ⅰ期の集落遺跡は、霞ケ関遺跡集落のうち第1・2次調査区部分、玉太岡（第8図⑱）、船川、杉の木、観音寺、花影などの諸遺跡があげられるが、居住域のおおむね全容が知られるものは、未報告の霞ケ関遺跡を除き1例もない。霞ケ関、船川では60m²を越える大型住居跡が確認されており、断片的な資料から推測すると、1タイプなど大・中型の竪穴住居で構成される集落は存在するようだ。花影遺跡は居住域は未確認だが、8基の方形周溝墓が出土しており、対応集落は拠点的存在だったことをうかがわせる。それらの状況をつなぎあわせて推測を重ね、Ⅰ期の集落は、立地とともに宮ノ台式併行期の拠点集落と似たありかたを示す可能性を指摘しておきたい。

Ⅱ期の集落遺跡は、駒堀、白草、大野田西（第8図⑳）、船木（第8図⑮）、焼谷、大谷、四反歩、屋田、明戸東、円阿弥、大西（第8図⑲）、附島遺跡など類例は多い。その多くはⅡ(新)期に属するが、船木遺跡、焼谷遺跡はⅡ(古)期、駒堀遺跡、白草遺跡などはⅡ期を通して継続したようだ。集落構成も一様ではない。前節でみたように、2タイプの典型として駒堀遺跡A、B群、ほかに大西遺跡、船木遺跡は1もしくは2タイプに属するだろう。四反歩遺跡は3タイプ、焼谷遺跡、屋田遺跡もその可能性が高い。白草遺跡、明戸東遺跡、円阿弥遺跡は4タイプである。このように、Ⅱ期の遺跡に示される集落構成は変化に富むが、その差違にはどのような意味があるのだろうか。

住居の規模の差は、基本的にはそこに住む人間のいわば階層差を反映するものと考える。したがって、集落間において、それぞれを構成する竪穴住居の規模差が明らかならば、そこには集落間の格差が存在し、反映されていると考えたい。ここでの集落タイプは竪穴住居跡の平面規模にもとづいて設定されており、同時期に存在するタイプ間の差違は、集落格差を端的に反映しているといえるだろう。たとえば比較的広範囲における集落遺跡の様相が明らかにされた江南台地東部では、Ⅱ(古)期には焼谷集落と白草(古)集落、Ⅱ(新)期には四反歩集落と白草(新)集落あるいは円阿弥集落が同時存在の可能性を有しており、とすれば、おおむねⅡ期を通じて、3タイプと4タイプの集落が1km以内の距離で併存したことになる。現状では、4タイプ集落の分布が江南台地以北に限られているのがやや気にかかるが、両者の間には、端的に表現すれば、4タイプ集落に対し優位な3タイプ集落という秩序のもとでの連繋が存在した可能性を考えたい。とすれば、3タイプより明らかに大型の竪穴住居で構成される2タイプ集落は、さらに上位に位置づけられるだろう。駒堀遺跡が他例に

先んじて著名であったことから、2タイプ集落は吉ヶ谷式集落のいわば典型のごとき存在だった。駒堀遺跡の大型竪穴住居跡内部には複数の炉の痕跡が遺されており、そこに集住的な居住様式を想定する解釈もある(井上1983)。確かに、床面積の比較による単純な議論では素通りしてしまう重要な問題はあるだろう。しかし、少なくとも2タイプ集落は、吉ヶ谷式集落にあってはむしろ少数な存在で、それのみのあり方から、吉ヶ谷様式の集団の生活を類推することは困難である。なお、竪穴住居跡内部の平面構造については、引続き別稿で整理と検討をするつもりである。

III期の集落遺跡は、羽黒山(第8図⑯)、蟹沢、新井、駒堀、根平、桜山、大野田西、鶴ヶ岡、上組遺跡などがある。3タイプの例として蟹沢遺跡があるが、羽黒山、駒堀C群、根平、桜山、鶴ヶ岡、上組遺跡は5タイプに属する。III期は様相が一変し、集落構成は、5タイプの優勢が顕著である。同タイプ内にも集落ごとの格差が認められ、それは各最大規模の竪穴住居の規模差に示される。II期にみられた集落格差がある程度反映しているようにみえる。2タイプの駒堀A・B群に後続する駒堀C群、霞ケ関遺跡と同地域グループに属する上組遺跡は5タイプでも最大級である。III期が弥生時代から古墳時代への移行期、あるいは古墳時代初頭にかかることは第3節で触れた。5タイプは集落内部の住居規模のばらつきが大きく、小型竪穴住居を含むとともに、最大規模の竪穴住居の存在が明瞭である。いわば共同体内部の格差の顕在化ともみられるこの変化は、荒川をはさみ東隣する大宮台地地域でもほぼ同時期に確認されることは別稿で述べたことがある(石坂1993)。さらに広域を覆う視野で問題とする必要があるだろう。吉ヶ谷式土器の主要器種はIII期にいたっても健在だが、その集落は、竪穴住居周壁平面形の正方形化、5タイプ集落の卓越など、おそらく単位集団レベルにおよんだであろう、時代交替にともなう変成のダイナミズムと無縁ではありえなかったようだ。

7　お　わ　り　に

吉ヶ谷式集落の基礎的整理をもくろみ起稿したが、視点の移動に自らふりまわされたようで、当初の目的があいまいになったことを反省する。

吉ヶ谷式集落に内在する諸問題に立入り詳論するには、現状においてなお資料不足の制約は厳しい。何年かの後には、新たな資料の蓄積によって、ふたたび同じ主題での書き直しが必要となるだろう。が、すでに本稿で触れるべきだったにもかかわらず、果たせなかった問題もいくつかある。

第一に、赤城山南麓周辺の赤井戸式土器主体集落を対象に含めなかったことである。力がおよばなかったというお粗末によるのだが、吉ヶ谷式土器と赤井戸式土器とが同一様式である可能性は高く、包括的な再検討が必要だろう。さらに周辺地域、少なくとも北の箱清水・樽様式圏、南の「朝光寺原式土器」分布圏との比較も、吉ヶ谷式集落に関する整理の結果を解釈する上で重要である。本稿でこれらをいづれも欠落させたことは、第2節で紹介した井上尚明の視点（井上1983）を継承できなかった怠慢であると自責している。

第二に、III期の集落と古式土師器主体集落の関わりである。II(新)期～III期の集落と古式土師器主体集落が、併行関係はさておき、同一遺跡に同居している例は多い。従来漠然と、前野町式段階で消滅する、と表現されていた吉ヶ谷式土器最終段階と、吉ヶ谷式土器からの係累が認め難い古式土師器の初頭段階は、単一のホライズンに両者の接点が認められるか否か、を念頭に、再検討する必

要がある。本稿では見送ってしまったが、あらためて取り組みたいと考えている問題である。

なお本稿は、平成3年度財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成による成果である。

（1993年10月10日稿了）

註

(1) 古相が顕著なⅠ式と、新出の外来系土器が共伴するⅢ式の間を埋めるⅡ式の分割は、吉ヶ谷式期の中核を細分する重要な作業である。柿沼が暫定的に示しているとおり、それは可能とみられるが、甕以外の器類の型式変化をさらに検討してなされる必要があるだろう。柿沼編年案の提出から10年余を経、出土資料に恵まれつつある今日に課せられた宿題といえる。この点を含め吉ヶ谷式土器の編年を試みているが、本稿に先立ってまとめることができなかった。

(2) 吉ヶ谷Ⅲ式にみられるこのような状況は、周辺の他の地域様式にも共通するようだ。比田井克仁は、南関東の古式土師器編年の大要を示す中で、これらを古墳時代初頭「Ⅰ段階」と位置づけている（比田井1987）。その内容を説明した部分を引用しておく。

「Ⅰ段階、基本的には、小型器台、小型高坏、元屋敷式系高坏の波及を基準にする。壺・甕を代表とする在来の器種の変化により、新・古に分けられる。Ⅰ段階（古）の、甕は弥生土器の伝統をそのまま引きずっている。すなわち、相模川流域・東京西部・埼玉南部の地域では、口縁部刻みの刷毛調整台付甕が分布し、東京湾西岸地域では、口縁部刻み輪積痕ナデ・ミガキ調整台付甕、東岸地域では同技法の平底甕が分布する。

Ⅰ段階（新）になると単口縁の甕が増加する。技法的には、（古）段階と同様である。

壺は、Ⅰ段階通して、弥生土器以来の文様壺が出土するが、（新）段階には減少する。」（比田井1987、p66）

(3) 本稿での地形区分は、次の文献に従った。

1986「Ⅱ　埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史』別編3自然　埼玉県

(4) 同様の指摘は、すでに柿沼幹夫がおこなっている（柿沼1982）。

(5) 姥ヶ沢遺跡と富士山遺跡は、現在調査成果を整理中だが、担当者である新井端、森田安彦から内容について教示を得た。

(6) 大里村域の遺跡については、未発表資料に関するものを含め、出縄康行から多くの教示を得た。

(7) 大野田西遺跡は、現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団にて調査成果を整理中だが、調査を担当した佐藤康二から詳細にわたる教示を得た。

(8) 坂戸市域の遺跡については、未発表資料に関するものを含め、加藤恭朗から多くの教示を得た。

(9) 本稿において竪穴住居跡の規模を話題にする場合、それは遺構の床面積を基準にしている。床面積とは、周壁下端内の面積を指し、壁溝をもつものはそれを含んでいる。計測は、報告書に掲載された実測図をもとに、プラニメーターを使用しておこなった。

(10) 遺構によっては、出土遺物に和泉式土器、鬼高式土器を含むものもある。このような、吉ヶ谷式土器との時間的断絶が明らかな遺物はとりあえず論外とした。より古い、吉ヶ谷式土器と共伴する可能性のある土器を含み、報告書の記述からはそれらの層位的分離が読みとれない遺構はC群に含めた。

(11) 規模は土壙と竪穴住居跡の中間で、内部に炉や柱穴をもたない遺構。調査者の見解に従い、竪穴住居跡には含めていない。

(12) 本稿では、吉ヶ谷式集落の展開を論じながら、櫛描文土器主体集落についてはまったく論及できなかった。この件を素通りしては、吉ヶ谷様式圏の地域史は叙述できないだろう。他日を期して取り組みたいが、本稿との関連から僅かながら触れておく。やや印象論に傾くが、これまで「岩鼻式土器」の名称は、凡そ櫛描文をもつ土器（往々にして破片であるが）に対し、不用意に用いられがちだったのではないか。その結果、「岩鼻式」集団の存在感は、実態に無頓着に膨張したのではないか。他時期・他地域の櫛描文土器がこれと峻別されるべきことは当然だろう。後期櫛描文土器の整理と分析は、やはり柿沼幹夫によっておこなわれ、おおよその見通しが既に示されている（柿沼1987）。櫛描文土器主体集落は、岩鼻遺跡、霞ケ関遺跡など標識的な遺跡の実態が不明確なこともあり、吉ヶ谷式集落以上に良好な資料に乏しいが、今後とも確実な集落遺跡の内容に出発点を置く必要がある。櫛描文土器主体集落

の分布は、現状では、やはり台地地域に限られるようである。とりわけ坂戸台地東部に密で、一帯では吉ヶ谷式集落の分布を凌ぐ観がある。柿沼の「住み分け」モデルに示された櫛描文土器主体集団の領域と一致するが、東松山台地東部・高坂台地・坂戸台地東部は、櫛描文土器主体集落の分布圏となるようだ。一帯を排他的に占有したとは考えにくいが、大局的には吉ヶ谷式集落の分布圏に対し河川下流域に集中的に分布しており、内陸をめざした吉ヶ谷式集落とは異なる性格は暗示されている。小期細分の手続を経て、吉ヶ谷式集落とのかかわりを探っていきたい。

《引用文献》

石岡憲雄　1982　「『吉ヶ谷式』と『岩鼻式』土器について」『研究紀要』第４号　埼玉県立歴史資料館

石坂俊郎　1993　「大宮台地の弥生ムラ」『史観』第128冊　早稲田大学史学会

井上尚明　1983　「関東における後期弥生集落の一様相」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大塚　実　1986　「吉ヶ谷および岩鼻式土器の背景」『土曜考古』第11号　土曜考古学研究会

柿沼幹夫　1981　「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会

　　1987　「埼玉県北西部地方の櫛描文土器」『埼玉考古』第23号　埼玉考古学会

恋河内昭彦　1992　「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』平成３年度後期文化財担当者会議資料

田村言行　1979　「弥生時代後期における南関東の動向」『どるめん』23　JICC（ジック）出版

中島　宏　1984　『池上・池守　一般国道125号線埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県立さきたま資料館

比田井克仁　1987　「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号　早稲田大学考古学会

川本町　1990　『川本町史』

木村俊彦　1986　「滑川村新井・追越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

小林　茂・柿沼幹夫・鈴木秀雄　1989　「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第25号　埼玉考古学会

坂戸市教育委員会　1983　『坂戸市史』原始史料編　坂戸市

《遺跡発掘調査報告》

明戸東（あけどひがし）：礒崎　一　1988　『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

姥ヶ沢（うばがさわ）：新井　端・森田安彦　1991　「江南町千代遺跡群（姥ヶ沢・富士山遺跡）の調査」『第24回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会他

円阿弥（えんあみ）：利根川章彦他　1991　『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大西（おおにし）：鈴木孝之他　1991　『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大野田西（おおのだにし）：佐藤康二　1993　「嵐山町大野田西遺跡の調査」『第24回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会他

蟹沢（かにざわ）：川口　潤　1993　『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

霞ケ関（かすみがせき）：埼玉県霞ケ関遺跡発掘調査団　1966　『埼玉県川越市霞ケ関遺跡発掘調査記録』（『日刊 KASUMI GA SEKI』の合冊）

埼玉県遺跡調査会　1972　『霞ケ関遺跡第三次発掘調査概報』（『季刊 KASUMI GA SEKI』の合冊）

上組（かみぐみ）：黒坂禎二　1989　『上組II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

駒堀（こまぼり）：栗原文蔵・谷井　彪他　1973　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告II』埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集　埼玉県教育委員会

四反歩（したんぶ）：金子直行　1993　『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

白草（しらくさ）：礒崎　一　1992　『白草遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集　財団法

人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
代正寺（だいしょうじ）：鈴木孝之他　1991　『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
玉太岡（たまふとおか）：高崎光司　1990　『玉太岡遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第90集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鶴ヶ岡（つるがおか）：加藤恭朗　1987　『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報Ⅰ　坂戸市教育委員会
根平（ねだいら）：水村孝行他　1980　『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
羽黒山（はぐろやま）：長滝歳康　1991　『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第７集　美里町教育委員会
船川（ふながわ）：金井塚良一・高柳　茂　1987　『船川遺跡』船川遺跡調査会
船木（ふなき）：佐藤忠雄・斎藤国雄　1974　「大里村船木遺跡の調査」『第７回遺跡発掘報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
焼谷（やけやつ）：村松　篤　1991　『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』川本町教育委員会
用土・平（ようど・たいら）：丑野　毅　1984　「用土・平（ようど・たいら）遺跡」『寄居町史』原始・古代・中世資料編　寄居町教育委員会

研究紀要　第10号

1993

平成5年12月20日　印　刷

平成5年12月25日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪884

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社